

中年期から老年期に至る世代継承性の変容

深瀬 裕子・岡本 祐子

(2010年10月7日受理)

Process of Maintaining Generativity from Middle to Old Age

Yuko Fukase and Yuko Okamoto

Abstract: Generativity involves the following themes: creativity, offering something for the next generation, and maintaining. The theme of maintaining means leaving something of value for the next generation and is especially important for old age. We have thus investigated maintaining in old age and how this process changes from middle to old age. We carried out semi-structured interviews of 20 participants aged between 65 and 86 (mean age=74.15). The questions focused on their life story and generativity, and on maintaining in particular. The main findings were as follows. First, maintaining in old age involves some restraint in maintaining for young generation; on the other hand, maintaining in middle age accompanies taking direct responsibility for the young generation. Second, the process of maintaining consisted of ten stages, when it was not possible to take direct responsibility for maintaining for the younger generation, for example, when forced into retirement or when children cut themselves loose from their family, many participants desired to do this.

Key words: old age, generativity, maintaining, E. H. Erikson, changing process

キーワード：老年期，世代性，世代継承性，E. H. エリクソン，変容過程

問題と目的

世代性¹⁾とは、Eriksonによって提唱された第Ⅶ段階（中年期）に顕著になる心理社会的課題であり、最初に「次世代を確立させ導くことへの関心」と定義され（Erikson, 1950, 仁科訳 1977・1980, p.343）、後に「子孫を生み出すこと（procreativity）、生産性（productivity）、創造性（creativity）を包含するものであり、（自分自身の）更なる同一性の開発に関わる一種の自己-生殖（self-generation）も含めて、新しい存在や新しい制作物や新しい観念を生み出すこと（ジェネレーション）を表わしている」と再定義された（Erikson & Erikson, 1997 村瀬・近藤訳 2001, p.88）。前者は世代性の第一義的な親役割に焦点化されているのに対し、後者では親であることに加え、生産性や創造性のような包括的な概念を含んだものとなっている。その後、世代性が必ずしも成人期や中年期とい

た年代や、親役割に限られた概念ではないという報告がなされ（Bloom, 1994；串崎, 2005；Rothrauff & Cooney, 2008；Whitbourne, Sneed, & Sayer, 2009）、世代性に関する一連の研究を行っている McAdams & de St. Aubin（1992）は世代性を“成人期全体に通じた個性と関係性への欲求を基本とした、創造性（creativity）、世話（offering）、世代継承性（maintaining）への関心および行動”と定義している。さらに、特に成人女性において、家庭外役割を担うことが、世代性やアイデンティティと強く関連していることも示唆されている（西田, 2002；岡本, 2002）。以上の様に、世代性の関連要因として親役割以外のものも認められるため、研究対象は中年期に限らず広い世代に亘っている。

これまでの研究で、世代性が中年期後期から老年期にかけての年代で最も高い得点であることが示唆されている（McAdams, de St. Aubin, & Logan, 1993；丸島,

2000；下仲・中里・高山・河合，2000；中西・佐方，2001；申崎，2005）。例えば，中西・佐方（2001）は，8つの心理社会的課題の達成度を測定する尺度を用いたところ，世代性得点は男女ともに，中年期（40歳代）から中年期後期（50歳代）にかけて高い得点であることが認められた。これらの知見は，調査対象者が老年期の中では比較的若いため，社会との関連が強い対象者であったことも推察されるが，親役割や生産することが外的現実として減少する老年期においても世代性が発達する可能性もある。世代性が中年期を過ぎても発達する可能性について，以下の示唆が得られている。①祖父母が孫に多大の関心を持つとみられている我が国の文化的な局面が，高齢者の反応を刺激し，老年期に世代性が高くなる（丸島，2000），②孫や孫をケアする我が子とのかかわりで，祖父母が世代性を再強化する（杉村，1995），③引退後には，中年期の現実的束縛やプレッシャーからある程度自由になり，また世代継承への思いも一層強まって，得点が高くなる（申崎，2005）。

では，高齢者の世代性はどのような特質なのか。Erikson, Erikson, & Kivnick (1986 朝長・朝長訳 1990) によれば，老年期における世代性(祖父母的世代性)は，「世界を維持するために中年期の直接的な責任を越えた (p.79)」ものであり，「現在の世話を (中略) 今日の若い世代の未来，まだ生まれていない世代，そして世界全体としての存続への関心に結び付ける (p.79)」ものである。また，深瀬・岡本 (2010) では，老年期における世代性に自身の経験や上の世代から継承したものを次の世代に残そうとする様態が見出されており，これらが自己の死を強く意識した世代性であることが示唆された。さらに，自分の命や自己が生み出したものが象徴的に引き継がれているという実感が，老年期のテーマに対する取り組みを根底から支えるという指摘もされている（申崎，2005）。同様に，孫-祖父母関係に関する研究においても，孫からみた祖父母の機能と，祖父母からみた孫の機能のいずれにおいても世代継承感覚の促進という因子が見出されおり（田畑・星野・佐藤・坪井・橋本・遠藤，1996），老年期においては，世代性の中でも世代継承性の重要性が示唆される。

本研究の目的

以上のように，高齢者になっても世代性感覚が発達しているという示唆が得られているにもかかわらず，高齢者の世代性の特質に関する研究やその変容過程についてはほとんど明らかにされていない。本研究では

この点を検討することを目的とするが，老年期の世代性に関する仮説生成的研究であること，高齢者の回想を分析するという手法であることから，分析対象を限定する必要がある。そこで，世代性の課題が顕著になる中年期以降を分析の対象とし，老年期において重要であることが示唆されている世代継承性に着目する。

具体的には次の2点を本研究の目的とする。①中年期と老年期の世代継承性を比較する中で，老年期の世代継承性の特質を検討し，②中年期から老年期に至る世代継承性の変容を明らかにする。

なお本研究では世代性を Erikson & Erikson (1997 村瀬他訳 2001), McAdams et al. (1992, 1993, 1995, 1998) の定義を基に，年代により幅を持たせて“新しい存在や新しい制作物や新しい観念を生み出すこと (創造性，世話，世代継承性) への関心および行動”と定義し，世代継承性を Erikson et al. (1986 朝長他訳 1990), 丸島 (2005), 丸島・有光 (2007), 申崎 (2005), 深瀬・岡本 (2010) を参考に，“自分の死 (物理的・象徴的) を意識し，自身の経験や上の世代から継承したものを次の世代に残そうとすること”と定義する。

方法

対象者

高齢者の教養講座への依頼および第一著者の知人を通じて募った，65-86歳の高齢者20名（男性11名，女性9名。平均年齢74.15歳， $SD=5.59$ ）。対象者のプロフィールを Table 1 に示した。

調査手続き

個別に半構造化面接を行った。調査は対象者が指定する場所（大学の調査室，対象者の自宅など）で実施し，調査開始前に面接承諾書に署名を求め，録音と結果の公表についての同意を得た上で，内容を録音した。調査時間は120分-300分であり，対象者の負担にならないよう，1-5回に分けて行った。

まず対象者の生活歴を聞いた後，以下の調査項目で足りない項目について質問を行った。①中年期以降の後輩・子ども・孫とのかかわりをどのように体験したか（しているか）。②誰か・何かを世話することで得られる感覚は，過去と今とで異なるか。③世話されることについてどう感じ，世話してくれる者にはどのような思いがあるか。④将来に何を望むか。

なお本調査は広島大学大学院教育学研究科倫理審査委員会の承認を得ている。

分析方法

発達段階を軸にする必要があるため，小嶋 (2004), 松本 (2009) を参考に以下の分析を行った。①逐語記

Table 1 対象者のプロフィール

対象者 No.	年齢	性	家族 () は死去	同居家族 () は近隣在住	中年期以降の職歴 ハイフンは転職を、カンマは副職を示す	現職
A	86	女	(夫), 娘家族, 息子	独居	専業主婦	無職
B	82	女	夫, 息子家族, 娘 2 人とその家族	夫, (息子夫婦)	専業主婦	無職
C	81	男	妻, 息子家族, 娘 2 人とその家族	妻	管理職—管理職	無職
D	80	男	(妻), 配偶者, 息子 2 人とその家族	妻	会計事務—嘱託	無職
E	77	女	(夫), (息子), 娘	娘	農業, 事務職 (パート)	無職
F	77	男	妻, 息子家族	妻	福祉職員—教員	嘱託
G	77	男	妻, 娘 2 人とその家族	妻, (娘家族)	製造業 (定年退職)—管理職	無職
H	76	女	夫, 息子家族, 息子	夫, (息子家族)	製造業—調理職	無職
I	75	女	(夫), 息子家族, 娘 2 人とその家族	独居	農業, 事務職 (パート)	農業
J	75	男	妻, 娘家族	妻	技術職 (定年退職)—嘱託 (技術職)	無職
K	74	男	妻, 息子家族, 娘家族	妻	保安業 (定年退職)—企業	無職
L	73	女	(夫), 娘, 息子家族	娘	看護師—教員 (定年退職)	無職
M	73	男	妻, 娘家族, 息子 2 人とその家族	妻	教員, 自営業	自営業
N	71	男	妻, 娘 2 人とその家族	妻, (娘家族)	製造業—営業—運転手 (定年退職)—嘱託	無職
O	70	女	夫, 息子家族, 娘家族	夫, 義母	専業主婦	無職
P	69	男	妻, 娘 2 人とその家族, 息子家族	妻	保安業—研究職 (定年退職)—嘱託	嘱託
Q	68	女	夫, (息子), 息子	夫	事務職 (パート)	無職
R	68	女	夫	夫	事務職 (パート)	無職
S	66	男	妻, 娘 2 人とその家族	妻	販売職	無職
T	65	男	妻, (息子), 息子	妻, 息子	管理職—教員	嘱託

注) 表中の「息子家族」「娘家族」は孫もいることを示し、「息子夫婦」は孫がいないことを示す。

録から、世代継承性に関する語りを文章単位で抜き出し、対象者ごとに、発達段階やライフイベントを軸にした表を作成した。②世代継承性についてよく語られている7事例 (F, J, K, L, M, O, T) を用い、各語りに初期コードを付与した。③得られた初期コードを発達段階ごとに比較検討して、下位カテゴリにグルーピングした。④下位カテゴリを、ローデータを参照しながら相互比較・分類し、上位カテゴリを作成し、世代継承の様態でまとめた。⑤残りの13事例の一つ一つについて照合しながら、発達段階 (中年期, 中年期—老年期, 老年期) ごとに分類し、カテゴリと世代継承の様態の精緻化を行った。⑥上位カテゴリを、対象者の推移した経過を総合し、世代継承性の様態を考慮して、世代継承性の変容過程に関するモデルを作成した。

信頼性を検討するため、臨床心理学を専攻する大学院生1名が評定を行った結果、一致率は、中年期の上位カテゴリが89.06%、下位カテゴリが80.70%、中年期—老年期の上位カテゴリが86.84%、下位カテゴリが90.91%、老年期の上位カテゴリが82.35%、下位カテゴリが80.95%であった。なお分類が一致しない場合は、分析者 (第一著者) と評定者で協議の上、分類を決定した。

結果と考察

老年期の世代継承性

最終的な語りの総数204個を、発達段階を軸に分析した結果、中年期, 中年期—老年期, 老年期の3つの発達段階において、25個の下位カテゴリ、10個の上位カテゴリ、2個の世代継承性の様態が得られた (Table 2)。

中年期の世代継承性は、世代継承の前駆の様態である《職業生活における生成》や、《家庭内世代継承性への没頭》といった、次世代の第1の保護者であり教育者であるという直接的な責任を伴う世代継承性と、その実感や不全感から構成されていた。Erikson et al. (1986 朝長他訳 1990) の「世界を維持するための中年期の直接的な責任 (p.79.)」により、【直接的世代継承性】と命名した。一方、老年期の世代継承性は、〈一歩引いた立場に徹する〉、〈次世代の平安を願い、案じる〉といった、中年期の第1の保護者から一歩引いた立場から、残す、守る、案ずるといった世代継承性であり、そこへの満足感から構成されていた。Erikson et al. (1986 朝長他訳 1990) の「祖父母の生殖性の能力は、現在の世話を、未来への関心—すなわち今日の若い世代の未来、まだ生まれていない世代、そして世界全体としての存続への関心に結び付ける (p.79.)」により、【祖父母の世代継承性】と命名した。

中年期も老年期においても、信念や技術を残したい

Table 2-1 中年期から老年期に至る世代継承性のカテゴリ

発達段階	世代継承性の様態	上位カテゴリとその概要 人数: 対象者 No.	下位カテゴリ 人数: 対象者 No.	語りの例 (対象者 No.)
中年期	【直接的世代継承性】	《職業生活における生成》 職業生活において、次世代に残るようなものの生成を試みている。 n=9: F, G, J, K, L, M, N, P, S	〈試行錯誤の生成〉 n=1: J	「今考えたら馬鹿みたいなんですけど、型紙を作るのに、お客さんのサイズを測ったりして、色々やってみましたですよ。私が辞める時には 300 なんぼって型紙が出来てね。」(J)
			〈生成と自己成長〉 n=3: F, M, S	「35歳から45歳までが一番よく働きましたよ。35になると後輩がきて、我々は中間監督者ですから、教えながら自分も成長するんですよ。」(F)
			〈信念を持った生成〉 n=6: G, J, K, L, N, P	「当時の仕事は、新しい部品が出来ると、それがちゃんとした性能かを調べたり、必要な技術を開発をしてました。新しいことをずっと続けるような仕事でした。」(P)
		《家庭内世代継承性への没頭》 家庭生活において、次世代への直接的な責任を伴う世代継承に没頭している。 n=12: A, B, E, F, H, L, M, N, P, Q, S, T	〈信念を持った継承〉 n=12: A, B, E, F, H, L, M, N, P, Q, S, T	「子ども自身が、私たち親を悪い意味でのモデルにして生きて。親はそれでいいんだと思うんですよ。結局は親は親として育ち、子どもは子どもとして育つんですよ。」(F)
		《家庭内世代継承性の不全感》 職業生活における世代継承に集中しており、家庭内での世代継承に目が向けられなかったという思い。 n=4: J, L, N, S	〈継承に没頭できなかったことへの不全感〉 n=4: J, L, N, S	「夜勤があつて、子育てとの両立が難しく、仕事を辞めようとしたけど、人手が足りなくて辞められなかった。だから子供には何もできなかった。」(L)
		《直接的世代継承性の実感》 直接的世代継承ができた実感している。 n=14: A, B, C, D, G, H, J, K, L, M, N, P, Q, S	〈世話したものの成長を実感〉 n=12: A, C, D, G, H, J, K, L, M, N, P, Q	「(自分が働いていた会社の) 今課長をやっているのは、私が教えた人なんです。「おかげ様で課長になりました」って来てね。家で祝杯をあげました。」(C)
			〈残したという実感〉 n=5: B, H, L, Q, S	「(貧乏で) 子供にも物をそんなに買ってあげないじゃないですか。それが大人になってから「お母さん、僕らの家庭は生活するのに一生懸命だったね」って言ったんです。一生懸命だったってことは伝わったのかなって思いますね。」(Q)
		《直接的世代継承性の無力感》 直接的世代継承が思ったようにできなかったことに無力感を抱いている。 n=8: A, E, F, H, J, N, O, T	〈次世代と理解し合えない〉 n=1: O	「(私たちは戦後にね、お芋を食べ過ぎてたのよ) って言っても、(子供たちは) 焼き芋とかを想像して、「よかったね」って言うんですよ。あの言葉にはびっくりした。時代がこんなに違つたんだって。」(O)
			〈十分に関われなかった〉 n=2: F, T	「45歳になると、それ(若い人を育てる) だけではだめで、上と接することになる。そうすると若い人に手が回らなくなる。自分がただ使われているような感じ。」(F)
			〈世話したものの成長に不満が残る〉 n=5: A, E, H, N, O	「(子育ては) やっぱ私が上を見すぎて、教育ママすぎたのかしらねって思っ反省してるの。」(A)
〈生産したものが無くなる感覚〉 n=1: J	「(自分の立ち上げたシステムが廃止されることになって) 「他に使えるから」って言ったんですけど。会社としては、大きくなっていくに従って、変えていかないといけなかつたんでしょうね。」(J)			
中年期 老年期	【祖父母的世代継承性】	《世代継承性の希求》 直接的世代継承ができなくなつても、それを続けようとする。 n=14: A, B, C, D, F, H, J, K, M, N, O, P, S, T	〈自分の信念・経験を残す〉 n=10: A, B, C, F, J, K, O, P, S, T	「(退職後に) JICAに行こうかと思つたんです。あれは自分の特技を教えるんですよ。」(K)
		《直接的世代継承性の区切り》 直接的世代継承ができないと感じている、まさにその時の状態。 n=3: L, M, S	〈責任・使命感〉 n=9: C, D, F, H, K, M, N, S, T	「今やっている仕事、若者を支援するということについて、かつこよく言えば使命を感じているということですかね。」(T)
		〈直接的世代継承性の区切り〉 n=3: L, M, S	「退職する時は、寂しさっていうよりも、しんどさがあつたのか、すごく嬉しかった。定年したらやりたいこともいっぱいあつたからね。」(L)	

Table 2-2 中年期から老年期に至る世代継承性のカテゴリ (つづき)

発達段階	世代継承性の様態	上位カテゴリとその概要 人数: 対象者 No.	下位カテゴリ 人数: 対象者 No.	語りの例 (対象者 No.)
老年期	【祖父母的世代継承性】	《祖父母的世代継承性への取り組み》 一歩引いた世代継承をしようと感じている。 n=18: A, B, C, D, E, F, G, H, J, K, L, M, N, O, P, Q, S, T	〈一歩引いた立場に徹する〉 n=14: A, B, C, D, E, F, G, H, J, K, L, M, N, P	「もう、子どもたちは独立していい大人ですから、私が干渉することじゃない。孫の教育方針にも口出ししません。育てていく子は親の責任ですから。口出ししてはいけない。」(C)
			〈次世代の平安を願い、案じる〉 n=10: D, E, F, J, K, L, N, O, S, T	「(将来に思うことは) 家族、孫や子供が幸せにずっと生活できるように。日本全体もいつまでも平和でね。」(K)
			〈次世代を甘やかす〉 n=6: E, F, H, J, P, S	「子どもは自分が責任持ってやらないといけないけど、孫っていうのはお父さんお母さんがいるから、かわいいかわいいっていう方が強いよね。」(E)
			〈次世代を思い、自分のこと、特に自分が死んだ時の処遇を考える〉 n=7: D, E, J, K, O, P, Q	「(社会が高齢者に期待することは) 若い人に負担をかけない、医療費を使わないってことなんですよ。つまりは、健康でいることでしょうね。自分がたくさん病院に行くってことは、それだけ若い人に負担になるってことでしょう。」(K)
		《祖父母的世代継承性の充足感》 祖父母的世代継承性への取り組みに満足している。 n=12: A, B, C, D, E, F, H, I, K, L, N, P	〈次世代に自分を見る〉 n=5: A, F, I, K, L	「僕はまともにならぬ道を来てるから、(子供たちは) その背中を見てるんじゃないかな。やっぱり言葉づかいとか、私に似てると思いますね。それで孫はまた親に似てるよね。声なんてそっくりだね。」(K)
			〈次世代との情緒的交流に満足している〉 n=9: B, C, D, E, F, H, K, N, P	「我が子の時とは全然違いますよね。かわいいという感じで。未だに女の子でも「じいちゃん、風呂入ろう」なんて言ってくれますからね。」(P)
			〈次世代に残すものを守ったという感覚〉 n=2: B, I	「今はね、「先祖の土地を守らないといけない」って言う気持ち一身。」(I)
		《祖父母的世代継承性の不安全感》 祖父母的世代継承性が十分にできないと感じている。 n=14: A, C, D, E, F, G, H, J, L, N, O, P, Q, R	〈一歩引くことへの寂しさ〉 n=5: A, F, H, N, P	「(嫁に気をを使うから) だから思う存分には(孫のしつけを) できなかった。叱ることが出来ないのよね、お嫁さんの手前。難しい、やっぱりね。」(H)
			〈次世代との壁を感じる〉 n=7: A, C, G, H, J, N, O	「私はお祖父さんに色々な事を教えてもらって、それが役に立ってると思うんだけどね。それを今孫に教えようとしても、向こうの方が上なんですよね。技術継承ってのはもうないんだよね。」(G)
			〈残せないことへの不安全感〉 n=5: D, N, O, Q, R	「子どもがいないから、跡継ぎのことね。私はやっぱりいないよりいたほうがいいよねって言うけどね。」(R)
			〈情緒的交流が出来ない事に不安全感を抱く〉 n=5: D, E, H, L, P	「孫はそれぞれもう忙しいから、めったに会わないですね。最初から別だからね。やっぱりもっと会いたいよね。」(E)

という関心が中心的課題となっており、de St. Aubin & McAdams (1995) や丸島・有光 (2007) などの世代性への関心を測定する尺度の構成概念とも一致している。さらに本研究では、中年期から老年期の時期に《世代継承性の希求》という上位カテゴリが見出されたことから、老年期において【直接的世代継承性】から【祖父母的世代継承性】に移行するのではなく、【直接的世代継承性】に【祖父母的世代継承性】への取り組みが加わるものと推察される。この点は、世代継承性の変容過程と合わせて後述する。

さて、《直接的世代継承性の区切り》は、定年退職の影響が強く、岡本・山本 (1985) の指摘する、定年退職における「受動的歓迎型」に類似した様態である

と考えられる。この受動的歓迎型は、肯定的な将来展望は示されているが、自我のエネルギーのレベルはそれほど高くなく、自分の役割の定義が不明瞭であったり、自覚されていないことが示唆されている (岡本・山本, 1985)。《直接的世代継承性の区切り》を通過した対象者は、中年期に取り組んだ直接的世代継承の領域との関わりを、老年期になってほとんど絶っており、職業生活における役割が曖昧であったことも推察される。しかし《直接的世代継承性の区切り》に該当する対象者が少なく、この点については今後さらに検討する必要がある。

以上、本研究で見出された【祖父母的世代継承性】の特質として、次の3つが示唆される。まず、【直接

的世代継承性】に比べ、そこから得られる効果に質的な違いが認められた。【直接的世代継承性】では、次世代の成長や自分の技術が物理的に社会に還元されることが実感、不全感の基準であるのに対し、【祖父母的世代継承性】では次世代に自分が残ること、先祖から継承されたもので、次世代に残したいと思うものを守ることなど、今すぐの効果求めず、むしろ象徴的に残ることが基準であった。次に、死や退職など、世界から退くという気持ちが【祖父母的世代継承性】の背景にあるため、「生きているうちに自分の理念を残さなければならない」という気持ちが強かった。最後に、〈次世代に残すものを守ったという感覚〉、〈次世代を甘やかす〉といった下位カテゴリや、次世代との交流が基準になっていることから、従来から指摘されている日本の家意識の高さや、孫への関心の高さという文化的局面が特質として認められた。

中年期から老年期に至る世代継承性の変容

10個の上位カテゴリを、各対象者のカテゴリ間の推移に沿って分析し、世代継承性の様態を総合すると Figure 1 のようなプロセスが見られた。これを本研究における中年期から老年期に至る世代継承性の変容過程とした。

まず中年期と老年期の世代継承性の関連について検討する。《職業生活における生成》と《家庭内世代継承性への没頭》という2つの領域にその始点が認められた。岡本 (2002) は、成人女性において、職業がアイデンティティの中核としている人々とそうでない人々は、青年期にその分岐が見られると指摘している。これを踏まえると、本研究の結果からは、職業を中核とした場合とそうでない場合で中年期において世代継承性の始点が異なることが示唆される。しかし、本研究ではその経過に職業中心と家庭中心の対象者ご

との特徴や性別との関連が見出しにくかった。また《職業生活における生成》に取り組んだ対象者9名のうち4名が《家庭内世代継承性の不全感》を抱き、その後3名は《家庭内世代継承性への没頭》を通過していた。さらに《職業生活における生成》を通過した場合にも、《直接的世代継承性の実感》に家庭内に関するものが含まれているなど、職業生活と家庭内における境界が曖昧であった。これは、本研究のデータが高齢者の回想であるという要因が大きいと考えられる。すなわち、職業生活や家庭内での親役割を後から振り返る時、それらはある程度渾然一体となった世代継承性への取り組みと感じられるものと推察される。

次に、《祖父母的世代継承性への取り組み》と《世代継承性の希求》の関係を検討する。【祖父母的世代継承性】に至ったのは20名の対象者全員であったが、このうち12名が《世代継承性の希求》にも並行して存在し、別の2名は《直接的世代継承性の区切り》の直後に《世代継承性の希求》を通過していた。先の本研究の知見と合わせると、【直接的世代継承性】は子どもの独立、退職といった外的理由により収束し、そこに本人の意思が反映されにくいため、一歩引いた世代継承を試みても、次世代に信念や技術を直接的責任のもとで継承したいという希求は強く残ることが示唆された。

さて、老年期に世代性得点が高くなることについて串崎 (2005) は、引退によりジェネラティヴィティの否定的要素へとつながる現実的な束縛からある程度自由になり、世代継承への思いも一層強まるためと考察している。しかし本研究では、死や世界からの引退からくる「残すこと」の使命感が強く、残せない場合の不全感（〈残せないことへの不全感〉〈次世代との壁を感じる〉）や、祖父母として一歩引くことへの寂しさ

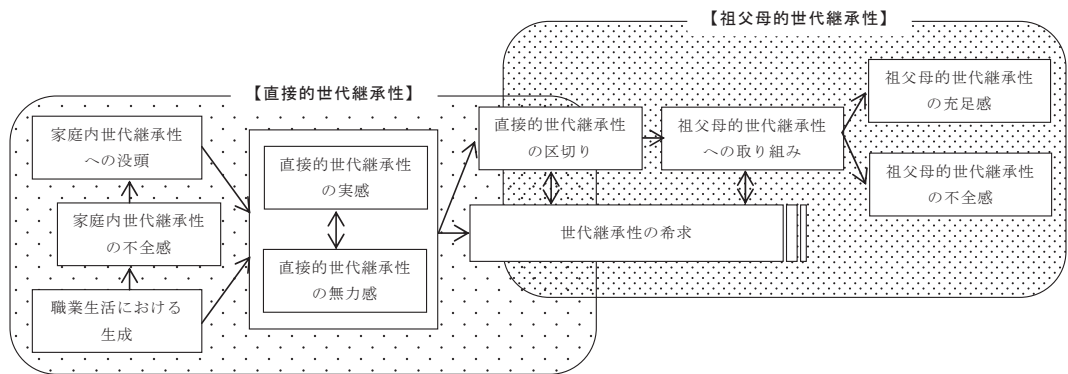


Figure 1 中年期から老年期に至る世代継承性の変容過程

も並行して存在していることが認められた（〈一歩引くことへの寂しさ〉）。また、老年期になると世代継承性が質的に広がることが示唆されたことから、直接的な世代継承性が満たされない場合でも、質的に異なる祖父母の世代継承性への取り組みにおいて満たされるなど、2つの世代継承性に同時に取り組み、相互に補い合っているために、世代継承性を得点化する先行研究において老年期の得点が高くなった可能性が考えられる。

最後に、中年期の世代継承性への満足感と老年期の世代継承性への満足感の関連について検討したが、《直接的世代継承性の実感》、《直接的世代継承性の無力感》と、《祖父母低世代継承性の充足感》、《祖父母の世代継承性の不全感》に明確な関連は見出されなかった。【直接的世代継承性】への評価と【祖父母の世代継承性】への取り組み方には多様な様態があるために関連が見出されなかったと推察されるが、2つの継承性はある程度独立している可能性も示唆され、この点については今後の課題としたい。

まとめと今後の課題

本研究では、世代性の中でも、特に老年期に重要となる世代継承性について検討を行った。その結果、中年期の世代継承性は次世代の第1の保護者であり教育者であるという直接的な責任を伴う世代継承性であり（【直接的世代継承性】）、老年期の世代継承性は、一歩引いた立場に徹する、一歩引いた役割から残す、守る、案ずるといった世代継承性であることが認められた（【祖父母の世代継承性】）。祖父母の世代継承性の特徴として、象徴的な継承が求められること、世界から退くことが近い将来として意識されているため、「残った時間で出来るだけ多くのものを残したい」という切迫した思いがあること、家意識や孫への愛情といった日本独自の要因が関連していたことが認められた。また、老年期においても、直接的世代継承性への希求が強かったことなどから、老年期においては直接的世代継承性に祖父母の世代継承性への取り組みが加わり、世代継承性の質的幅が広がるものと推察された。

今後は、本研究で示された直接的世代継承性と祖父母の世代継承性の関連、および質的に広がりがあることでの肯定的、否定的影響を検討することが求められる。

【注】

1) 原語はGenerativityである。「生殖性」と訳されることもあるが、本稿では鑑（1986）に基づき「世代性」と記すこととした。

【引用文献】

- de St. Aubin, E., & McAdams, D. P. (1995). The relations of generative concern and generative action to personality traits, satisfaction/ happiness with life, and ego development. *Journal of Adult Development*, 2, 99-112.
- Bloom, P. (1994). Generativity within language and other cognitive domains. *Cognition*, 51, 177-189.
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: W. W. Norton. (エリクソン, E. H. 仁科弥生 (訳) (1977・1980). 幼児期と社会1・2 みすず書房)
- Erikson, E. H., Erikson, J. M., & Kivnick, H. Q. (1986). *Vital involvement in old age*. New York: W. W. Norton. (エリクソン, E. H., エリクソン, J. M., & キヴニック, H. Q. 朝長正徳・朝長梨枝子 (訳) (1990). 老年期—生き生きしたかかわりあい— みすず書房)
- Erikson, E. H., & Erikson, J. M. (1997). *The life cycle completed*. New York: W. W. Norton. (エリクソン, E. H., & エリクソン, J. M. 村瀬孝雄・近藤邦夫 (訳) (2001). ライフサイクル, その完結— みすず書房)
- 深瀬裕子・岡本祐子 (2010). 老年期における心理社会的課題の特質—Eriksonによる精神分析的個体発達分化の図式 第Ⅷ段階の再検討— 発達心理学研究, 21, 266-277.
- 小嶋由香 (2004). 脊髄損傷者の障害受容過程—受傷時の発達段階との関連から— 心理臨床学研究, 22, 417-428.
- 串崎幸代 (2005). E. H. Eriksonのジェネラティヴィティに関する基礎的研究—多面的なジェネラティヴィティ尺度の開発を通して— 心理臨床学研究, 23, 197-208.
- 松本 学 (2009). 口唇裂口蓋裂者の自己の意味づけの特徴 発達心理学研究, 20, 234-242.
- McAdams, D. P., & de St. Aubin, E. (1992). A theory of generativity and its assessment through self-report, behavioral acts, and narrative themes in autobiography. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 1003-1015.
- McAdams, D. P., de St. Aubin, E., & Logan, R. L. (1993). Generativity among young, midlife, and older adults. *Psychology and Aging*, 8, 221-230.
- McAdams, D. P., & de St. Aubin, E. (1998). *Generativity and adult development*. Washington, DC: American Psychological Association.
- 丸島令子 (2000). 中年期の「生殖性 (Generativity)」

- の発達と自己概念との関連性について 教育心理学研究, 48, 52-62.
- 丸島令子 (2005). 世代性尺度の作成—世代性の関心と行動モデルの測定— 心理臨床学研究, 23, 422-433.
- 丸島令子・有光興記 (2007). 世代性関心と世代性行動尺度の改訂版作成と信頼性, 妥当性の検討 心理学研究, 78, 303-309.
- 中西信男・佐方哲彦 (2001). EPSI—エリクソン心理社会的段階目録検査— 上里一郎 (監) 心理アセスメントハンドブック (第2版) 西村書店 pp.365-376.
- 西田裕紀子 (2002). 成人女性の世代性に関する研究(2) 日本教育心理学会総会発表論文集, 44, 26.
- 岡本祐子 (2002). 成人女性のアイデンティティの危機と発達 岡本祐子 (編著) アイデンティティ生涯発達論の射程 ミネルヴァ書房 pp.79-120.
- 岡本祐子・山本多喜司 (1985). 定年退職期の自我同一性に関する研究 教育心理学研究, 33, 185-194.
- Rothrauff, T., & Cooney, T. M. (2008). The role of generativity in psychological well-being: Does it differ for childless adults and parents? *Journal of Adult Development*, 15, 148-159.
- 下仲順子・中里克治・高山 緑・河合千恵子 (2000). E. エリクソンの発達課題達成尺度の検討—成人期以降の発達課題を中心として— 心理臨床学研究, 17, 525-537.
- 杉村和実 (1995). ライフサイクル—男性と女性— 南 博文・やまだようこ (編) 老いることの意味— 中年期・老年期— 金子書房 pp.117-152.
- 田畑 治・星野和実・佐藤朗子・坪井さとみ・橋本剛・遠藤英俊 (1996). 青年期における孫・祖父母関係評価尺度の作成 心理学研究 67, 375-381.
- 鎌 幹八郎 (1986). エリクソンの発達論とライフサイクル 村井潤一 (編) 別冊発達 ミネルヴァ書房 pp.160-213.
- Whitbourne, S. K., Sneed, J. R., & Sayer, A. (2009). Psychosocial development from college through midlife: A 34-year sequential study. *Developmental Psychology*, 45, 1328-1340.